編集後記

短歌の部

「作歌について」

太田　博

――初冬の空に、いちゃうの黄が輝いている――

文芸ふじさわ56集短歌部門に作品を寄せられありがとうございました。投稿者は二十二名、回を追うごとに投稿が少なくなっているのは、残念です。(前回は二十九名)高齢化が進む現在致し方のないのかも知れません。

応募者をふやすためには、中高生、若い人たちにあらためて、呼びかける必要を感じています。

短歌は、万葉集、古今、新古今集をへて現在まで詠いつづけられてきた千三百年余の伝統ある抒情詩です。藤沢から短歌の灯をともしつづけるために、皆さんのご健詠を期待しています。そこで、あらためて基本についてふりかえって見たいと考えます。

私の師である宮柊二先生は、短歌の三要素として、心、言語、声調について教えられました。心とは、個性、見方、感覚、発想、把握などであり、言語とは、うたを表現する言葉、フレーズの意味です。声調とは、うたの調子、韻律、リズムのこと。この三者が有効に仂いたときに良いうたが生まれるのです。短歌には自然の美しさや、自然現象を詠う自然詠、日常や身辺を詠う日常詠、社会現象やそれにともなう作者自身の考えを反映させる社会詠などがあります。いずれも感動をいかに表現するかが大切です。また、作歌した作品は、作りっぱなしでなく、推敲も欠かせません。作歌を継続することも心がけて下さい。以上作歌について私の考えの一端をのべさせていただきましたが、参考にして下されば幸いです。

川柳の部

宮塚　肇

前年から続くコロナ禍の影響を懸念して、藤沢川柳大会は中止となった。

本年は五十人の方からのご応募があり、微増ではあるが前年を上回ったことは喜ばしい。応募句の中からこの特異な時代の只中にある状況を印象付ける句を拾ってみたい。

「二年たちマスクの下がだらけてる（青窓）」、もう二年とも、まだ二年ともという感があり、時間経過の感覚を鈍らせる沈滞の二年である。「玉の汗ぬぐう間もない救急医（いく生）」、「コロナ禍で人出が足りぬ医療界（憲治）」であり、医療関係者のご献身とご苦労には、敬意をこめた感謝の念しかない。日常生活も「リモートで帰省墓参と様変わり（晶子）」、「眠る子の側で父さんテレワーク（万理）」、「家飲みにラストオーダー急かされる（政勝）」、「コロナ禍にスマホ片手の一人鍋（尚風）」、「画面でのライブで出せぬ声と汗（正明）」と一変している。そして、「マスクして目尻で笑うニューライフ（順子）」とマスクは欠かせない。たまの外出や旅行先でも「接種済証明見せる旅の宿（小澤敏夫）」、「ハクションでその場に居れぬ事となり（憲治）」、「試食ない売場を巡る味気なさ（健司）」となる。

本来なら国を挙げての慶事となるはずのオリンピックも「国論を二つに割ってやる五輪（かず）」で、国民の大多数は開催に疑問を呈していた。しかし、「始めたら夢中になって見る五輪（かず）」であり、先ずは良かったということとなった。経費の膨張や感染第五波への影響など当初の懸念に対する公的な検証はなされないままである。後世にどのように評されるであろうか。

また、「公文書焼いてしゃべらぬお役人（信吉）」、「忖度も座右の銘に宮仕え（竹花敏夫）」など、国の土台が揺らいでいる。川柳人は黙してはいけない。

対照的に、大谷選手の大リーグでの活躍ぶりは、多くの人に活気を与えてくれた。「投げて打ち人柄までも時の人（次郎）」、「歴史的快挙大谷二刀流（茂子）」、「二刀流もう一太刀と観るテレビ（栄）」。翔平君、ありがとう。

（二〇二一年十二月記）

俳句の部

堀口　みゆき

今回は九八名の方から応募がありました。

昨年、多くの方に「文芸ふじさわ」があることを知って頂くために新たな試みとしてみらい創造財団の皆様が藤沢市の広報番組にて宣伝。ＪｃｏｍのＴＶに俳句と川柳について放送という取り組みがありました。

「はじめての文芸ふじさわ」というタイトルで川柳の編集委員の宮塚氏と私が出向き、芸術文化事業課の職員のお二人及びＴＶ局のキャスターの方が川柳と俳句に挑戦。俳句の方は市民会館近くの奥田公園でミニ吟行。三月でしたが、まだ桜が二分咲き程度。殺風景な公園にはブランコがあり丁度、春の季語にもなるのでお題は「花」と「ブランコ」にしました。職員の皆さん、今まで作句は殆ど経験なしということでしたがスタート。出来上がった三人の方の作品を拝見。推敲（すいこう＊手直しすること）添削させて頂きました。放送時には時間的にも制限され充分な説明ができず、この場を借り一部作品をとおし推敲の大切さを考えたいと思います。皆様、頑張ってしっかり作られていましたが、基本的な部分など勉強して頂くととてもよくなると感じました。

職員のお１人の原句「桜雨子ども長ぐつ花もよう」を例にとりますと

○季語の使い方　桜の頃に降る雨は桜雨という使い方をしない。「花の雨」という季語がある。

○三段切れにならないように助詞を入れたり言葉を短くする。

原句　「桜雨／子ども長ぐつ／花もよう」

添削句「花の雨子の長ぐつの花もよう」

ＴＶでの添削はここまでしたが本当はもう少し推敲します。長ぐつということで雨降りが想像できますし「花もよう」と季語「花の雨」の花がダブる感じがするので「花の雨」の季語の代わりにブランコを置いた方がよかったと思います。長ぐつの花模様の花は季語にはなりませんので、ブランコをふらここにして

添削句「ふらここや子の長ぐつの花もよう」

とすれば雨天のためブランコの側で長靴を履いた少女が乗りたいのに残念がっている心理状態が表現できます。

今回の第56集の応募では、番組をみて句を作りたくなったという若い方も応募され、また、外国籍の方も応募頂くという嬉しい傾向にあります。

五行歌の部

橋本圭子

今年も「文芸ふじさわ56集」にご参加いただき有難うございました。文芸とは自分の思いを言葉にして表すことです。読み手に自分の思いを正確にくみ取ってもらうことが肝心です。五行歌は季語も字数の制限もなく、折々の思いを平易な言葉で五行にまとめる文芸です。

人の思いは時と共に移ろいます。推敲したつもりの自作の歌を後になって手直ししたくなることがあります。これは読み手にとっても同じで、以前はスッと見過ごしていた歌に後になってグッと惹かれることがあります。詠み手と読み手の移ろい易い思いが重なった偶然の出会いが、忘れられない作品として長く心に残る一首となるのです。

自身を客観的に見つめて五行歌を詠み、一首携えて定例の歌会に参加する。歌友の歌を互いに鑑賞し、その思いを交換し合う。この談笑と交流の時間こそ五行歌遊びの醍醐味です。

私たちはコロナの感染拡大で長い自粛生活を強いられています。五行歌の集まりにも制限がつく事態となった今、改めて五行歌を介しての交流会が日常生活の句読点となり、潤いと活力を与えてくれていたのだと実感しています。私たちは今（時）此処（場所）に居て、思いを歌にすることで、文字通り「時空を超えて」自由に遊べるのです。

藤沢で五行歌を始めて間もなく20年になります。発会当初からの歌友も相応に歳を重ねました。今回の歌にも老いをテーマの歌が多数みられます。その内容は老化を悲観して嘆くというより、冷静に自身の現状を見つめて、苦笑しながら自戒し自分を励ましている歌が多いと感じますがいかがしょうか。

「振り出しに戻る」
双六ではないけれど
何しに来たのか
思い出せず
階段を下りる

これからも五行歌を楽しみ、心身共に豊かで健康な日々を過ごしましょう。

現代詩の部

山田　美智子

令和三年は新型コロナウイルス感染症予防対策の自粛下でオリンピックが東京で開催された事もあり、『金』が年を象徴する漢字に選ばれています。新しい生活様式が暮らしの中に浸透する中で、対人関係の希薄さが課題になってきている様に感じます。また、ご自宅で家族と過ごされる時間が大幅に増え、これまでに気がつかれなかった事々を身近に感じられる機会でもあるようにも思われます。

さて、「文芸ふじさわ」第五十六集現代詩では十二作品の応募がありました。

若い世代の方からご高齢の方まで、幅広い世代の作品は百花繚乱の様相です。

定型詩や文語体での詩は近代詩では見受けられますが、現代詩においては口語体の自由詩がほとんどです。読者の方には、読みやすさや意味を理解する上では口語体の自由詩の方が分かりやすいからです。今回、旧読み仮名と文語体で書かれた詩があります。俳諧では、季語や作風では当たり前になるのでしょうが、詩では意味や読み違えが生じ易い点に配慮して、味わって頂くと良いと思います。

今集の作品から、母親の優しいまなざしが表れた作品「透きとおる」。お子様の成長を健気に見守る温かい目線が良いです。

「子牛」はテレビの映像から、昔を想い出された懐かしさを感じる作品。ゲリラ豪雨や集中豪雨による被害が多くなっています。地球温暖化による自然現象の有様は私たちの暮らしを身近な所から脅かしている様にさえ感じます。「雨の祭り」では―雨は湿気の上に湿気を降らせ―のフレーズが良いですね。愛犬を悼む詩作品を継続されている「スージー」。これほど深く愛された犬も、また幸せなのでしょうね。一歩前に踏み出される事を愛犬も望んでいるのではないでしょうか。「えん」は黙読と音読の両方で味わってみても良いかもしれません。「名荷」は、自然の草花への愛着を感じさせます。自己主張ととらえる作者の主張が面白いです。「たねをまく風」では―忘れないで生まれた意味を―のフレーズが心に残ります。

「大人になった私たち」「愚痴」「うつる」

これからを生き抜く若い世代の方の作品。新しい生活様式が若者の成長の妨げにならないようにと、ふと感じました。

「スズムシ」飼育しやすい虫の代表とされる虫を飼育された体験から生まれた詩。雑食の昆虫は自ら生存する為に共食いもあるという自然界の連鎖は普遍なのでしょうね。

皆様、どうぞこれからも書き続けて下さい。次集で、またお会い致しましょう。

随筆の部

新田　愼二

今回の応募作は39名で、ほぼ前回並みの作品が寄せられました。作品からは熱気が感ぜられるものが多く、その努力に敬意を表します。お出しになった作品は、明らかに誤字と思われるものを除いて原文通り所載しています。作品の特徴を整理しますと、

・継続投稿者が27名、新しく投稿された方が12名であり、圧倒的に継続投稿者が多かった。これはここ数年にわたって見られる傾向でもあります。
・高齢者が多く、80歳以上と思われる方が多く見られました。逆に若年層と思われるものは少数で、若い方の投稿をいかに増やすかが次回への課題でもあります。
・男女間比率もほぼ同率で、総じて女性の活躍が目立っているといえます。
・原稿用紙に手書きした作品と、パソコン等でプリントした作品の割合は半々で、徐々にではありますがプリントが多くなっています。
・誤字と思われるものが若干。

随筆は、自己の体験や見聞感想などを、形式にとらわれず自由に表現した散文です。わが国では古くより親しまれ、名著も多く、現代においても新聞雑誌等、いたるところで目にすることができます。文章にリズムがあって、テーマが心地よく展開される文章に出会うと、なんともすっきりした気分になります。

今回の作品においても、貴重な体験や、日常の細やかな観察、人物評伝など、面白いテーマで大変楽しく読ませていただきました。

原稿用紙3枚以内という制約はありますが、それでも他のジャンルから比べると大きなスペースを頂いており、無駄にすることなく、そのメリットを有効に使って作り上げる必要があります。

そのためには「推敲」が大切です。一旦書き上げた作品であっても、再度読み返すと、必ず表現を変えてみたいと思う箇所が出て来ます。音読をしてみるのも良い方法です。

文章を書き上げるという作業は、頭脳を刺激し健康にとっても良いとされています、今年投稿された方が来年も投稿されることを期待します。